

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

ヤズィックアグルの蒼い空 13 アタック体制整う

8月1日は極めてハードな一日となった。しかし、それだけに成果も大きかった。隊員諸氏の連日の頑張りは目を見張るものがある。7:30にテントの外に出る。まだ陽が当たってこないで、猛烈に寒い。昨夕から夜半にかけては激しい風に悩まされたが、朝方トイレに起きたときにはそれもおさまり、星が瞬いていた。7:40ころになるとこのテントにも朝日が当たりはじめ、急激に暖かくなってくる。朝日に輝くヤズィックアグルは今日も凜とした姿で聳立している。



右股氷河へ渡る

小生が水没した沢が下に

7:50にC1を出発。若手の佐藤、三戸呂の両君がルートを開拓していくのを松田、久根、大西の3人が荷上げと後方支援をするという作戦を立て、昨日張った5本のフィックスドロープに加え、5900mのプラトーまでさらに6本のフィックスを張った。11:50にプラトーに立ったが、このころから小雪が舞い始めた。急傾斜が終わったプラトーには下部から引っ張る力が働いたため、当然ながらあちこちにクレバスがある。その多くはヒドゥンであるので厄介だ。アンザイレンして安全を期す。このあたりまで来ると、山は目指す頂上が大きく迫ってきて、登頂ルートが予測できるようになる。いやが上にもモチベーションも高まってくる。

13:45、6070m地点まで登り、そこをC2と定めテントを張った。テントが吹き飛ばされないようにアイスクリューでしっかりと固定し14:40には下山を開始した。プラトーを下り、5800mあたりまでくると対斜面に張られたC1が豆粒のように見える。ところが、よく見ると二つ張ったテントの一方が風で吹き飛ばされている。下るにつれ、猛烈な風となり、雪も交じる大変な天気となった。そんな中、飛ばされたテントの修復作業にかかる。6070mまで荷上げた後の疲労困憊した身体で、風速10mほどの中での厳しい作業。各自やはり頼もしい山やである。誰言うことなく、自分の役割を心得、仕事をわきまえている。疲れて身体が動かないのは誰も同じだが、愚痴一つこぼさない。いい仲間だ、心底そう思える場面であった。約1時間かけてようやくテントを張り直すことができた。

夕食はカレーうどん。さすがに疲れからか、松田さんと僕は食欲がなかった。食後7:30からミーティングを行った。僕の頭の中ではすでに昨日あたりから暖めていたタクティクスの変更を登攀隊長として隊員に提案した。いろいろな意見が出されたが、最終的に決めた結論は、僕の出した案通りとなった。それは明日2日を休養日とし、3日登頂のためのC2入り、4日にアタックをかけるというものだった。当初の予定ではアタックは7日に予定していたが、予定日より3日もの計画の前倒しは、荷上げが順調に進んでい

ることと、天候の予測、さらには高所での滞在時間を長くすることの消耗などを総合的に考えた結果である。順応にもう少し時間をかけるべきだとか、C2 より上の状況が不明であるなど、どの意見も最もであったが、最終的には全員の合意を得た。決まった以上はみんなで全力を尽くしたい。不通になったままのBCとの交信は相変わらず復活しないのが不安である。BCでもさぞやきもきしていることだろう。

8月2日は、曇りで終日風の強い一日であった。アタックに向けての最終調整の日。しかし、僕は昨日C1テントが風で飛ばされたこと、さらには一晩中強風が吹き荒れていたことから、無人のC2テントが心配で仕方なかった。もし何かあったらと嫌な胸騒ぎがする。それで三戸呂君を伴ってC2を確認してくることにした。10:00に出発。10:35にはフィックスの終了点に到達。そこからはアンザイレンして11:30、5970m地点にてC2テントの無事を確認できた。山を見て、頂上稜線へ取り付くりッジの目処とその先の登頂までのルートをシミュレーションする。その上で三戸呂君に「登頂ルートはどこをとればいいのか？」と尋ねると、全く僕が描いているのと同じラインが返ってきて、二人の意見の一致をみた。明日のC2入り後の偵察で稜線に登り、雪庇の様子が確認できさえすれば登頂はそれほど困難ではないように思えた。

広い氷河は周囲を6500m級の峰に囲まれており、すぐ右手の6445m峰など今からでも登って来られそうだ。「どうだ、来たついでにもう一つ内緒で登っちゃおうか。」と、冗談も出るほど。しかし、風は強い。そんな中テントの無事が確認できればこれ以上登る必要もない。登頂に向けて、体力の温存も重要なこと。今日はそのための休養日なのだから。三戸呂君もそれは十分に分かっているようで、「下りよう。」と言うと「そうですね。」とすぐに返事が返ってきた。12:20にはC1帰着。佐藤君がフルーチェを作り、松田さんがコーヒーを用意して迎えてくれた。その後も、風は強いままだったが、テントの中はまったりとした天国だ。

いよいよアタック体制が整ったということで、留守本部に電話する。山岳協会の宮本会長には、開口一番「もう登ったのか？」と言われ「そりゃ早すぎですよ。」と答えたが、信毎で逐一報道されているので、我々の隊が順調だと言うことは先刻ご承知なのだ。一足先に帰国した山内君が昨日帰国し、今日大町に戻ったと聞いて隊員一同、ほっと一安心した。

夕刻、少し頭痛がしたので、ロキソニンを一錠服用。フカヒレスープに中華丼で元気をつけた。氷河上のC1の最低気温は氷点下6度であった。

8月3日、いよいよアタックに向けてのC2入りである。8:00、陽が当たり始めると、一気にヤズィックアグルが光り出す。三戸呂、松田、久根、佐藤、そしてしんがりは僕。いつものオーダーで、個人装備15kgを背負っての出発である。

西嶋さんの予報では、今日は快晴、明日も崩れはないだろうとのことだったが、まさにその通りのピーカンである。佐藤、久根の二人と松田、三戸呂、大西の2パーティに分れ、クレバスに落ちないようにアンザイレンして進む。一步一步が苦しい。しかし、これを乗り越えてこそヤズィックアグルの神は我らを祝福してくれるのだ。



C2へ続く6000mのプラトーへ
この先がクレバス帯だ

